高木正朗編著

『18・19世紀の人口変動と地域・村・家族——歴史人口学の課題と方法——』
川口洋

本書は、高木正朗氏を研究代表者とする平成15～18年度科学研究費補助金の助成を受けた共同研究の成果報告の側面を持つ。そのため、地理学、社会学、経済史、数学など多分野にわたる研究者との対話なしには実現し得ない視野の広さを特色とする。他方、本書は高知氏の20年以上にわたる旧仙台藩領における息の長い現地調査の結晶でもある。研究期間が厳しく制約されてプロジェクトのリーダーとして、また、長年にわたって古文書史料を保存してきた高木の手懸け研究姿勢に対し、心から敬意を表したい。

わが国の歴史人口学を育て上げた速水源氏によれば、かつてdemographyには世界の土語が当てられ、政行や軍事など国勢に関わるstatistics（政表）と対をなしていた。demographyは、民衆の生活状態を表す用語として近代移行期の日本に受容された。草創期には歴史民勢学という言語が検討されたこともあったhistorical demographyに通底する問題意識は、古文書史料を通じて言うして屋延見ことのできる過去の人口現象を多変量解析法を適用する、国際比較を強く意識した仮説検定型の研究方法との関係に、評者はここ小遣いし懸念していた。10人を越える本書の執筆者には、史料から民衆の日常生活に迫ろうとする姿勢が一貫しており、historical demographyの原点を見ることが示された。

第1部 地域編
第1章 東北地方の人口構造—仙台藩県方—関階村方人口200年の歴史—（高木正朗・新屋均）
第2章 『安永地風土記』にみる仙台村の田畑と人口—『御領分絵図』とGISによる分析—（川口洋）
第3章 天明飢饉期と陸奥国農村の人口と世界—仙台領3ヶ村の比較—（山本起世子）
第4章 明治後期の転換と地域「耐性」の様相—GISをもじった旧仙台領の地域分析—（石崎研二）
第5章 地域人口統計にみる出生と児童死亡—山形県村山郡興崎村：1884～1945—（村田啓子）
第6章 近代移行期の疾病・死亡構造—国際疾病分類（ICD）適用の妥当性—（中川克）

第2部 村・家族編
第7章 仙台村方の「屋敷」と庶民の移動—陸奥国西磐井郡・福明寺村—（河島一仁）
第8章 人口と家族構成（山本起世子）
第9章 幼年人口比率維持のメカニズム（松浦昭）
第10章 人口構造と平均余命（長澤克重）
第11章 年貯積人村（松浦 昭・李東彦）
第12章 貨幣経済と農民—買米制—塩専売制と村方一（李東彦）
第13章 人口減少と民政の展開—関藩「仕法」と狐狸寺村の対応—（高木正朗・向田德子）。

第3編 索証
第14章 江戸町方の人口政策と「人別省略仮書留」（大平祐一）。

第1章では、日本の歴史人群学の特徴である「宗門改帳」を用いた書政村を単位とする微細的研究法の克服と数学・医学・GISによる研究視角の拡張が図られた。まず、第1章で17世紀末から幕末期に至る203年間の仙台藩方人口と関係村方人口の推計が、5つの増減局面から構成されていることが確認された。他方、仙台藩領の人口変動は、同一ではなく、北部の勝沼郡下若柳村、南部の柴田郡足立村、中盆の磐井郡中村における天明飢饉直後の人口減少率と絶家率には、大きな地域差がみられた（第3章）。GISの活用については、第2章で『安永風土記』から田畑比率、性比、耕業などの分析を作成して仙台藩領の地域性を検討し、第4章で過去帳から確認できる三大飢饉時に死亡危機を経験した地域と収穫の変動を指標として明治後期の因科に対する安定性が高い地域との間に相関が見られたことから、里作への地域「耐性」が該地方の経験から醸成されたという新規性のある仮説が提案された。さらに、山形県北部山陰神崎村の出産・死亡に関する行政文書から死産率、新生児死亡率、後期乳児死亡率を算出するだけでなく、社会的健康状態を適用して、第5章では1885年における乳児の死因疾病に、第6章では1864年〜1898年の医療事情と死因疾病に初めて本格的な分析の手が入った。

第2章では、地理学、社会学、経済学、社会統計学、人口学の視点から陸奥国西磐井郡狐狸寺村の地方文書を体系的に分析することにより、史料に記録された一人一人の「顔」を見やすくして、精度の高い人口学的・社会経済的指標の算出が試みられた。

1793-1862年の狐狸寺村では、結婚年齢が低いにもかかわらず出生児数が少なく、平均50歳で隠居して長男に戸主を継承させる直系家族が支配的であったが、貧困層は結婚年齢が比較的高く、出生児数が少ないため、「代百姓」を立てて絶家を防いでいた（第8章）。婚姻移動の地理的範囲は、1823〜1832年の人口安定期と1833〜1842年の人口急減期で顕著な差はみられず、近隣村に嫁を出し、遠方の村から嫁を迎える傾向が観察された（第7章）。狐狸寺村が所有する関藩による人口政策実施に伴って記録された御用留などを用いて、第10章では、19世紀前半の生命表が推計に頼らず史料から作成され、第13章では、8歳まで生存できたが胎児の6割にとどまるという過酷な生存環境や、〈人口調査を含む〉死因が農開闢に集中していた事実を含む貴重な分析結果が得られた。第9章では、出生率が幼年人口（総人口に占める15歳以下人口の割合）を一定範囲内に保つように変化する現象が観察されたため、家族や世帯ではなく、村の「無意識の構造」が人口行動に関与した可能性を示唆する幼年人口維持仮説が提起された。

第11、12、13、14に一関藩の貢税、貯米制度、および塩専売制度について検討した。同藩は、毎年毛兎を行い収穫率を把握して、米・金・鬱薬の納入高や金、代、手形の価値を変えて、細かく年貢を算出していた。一関藩は、貯米制度を通じて村に貨幣を供給する一方、年貯積入制度や塩専売制度を通じて村から貨幣を回収していたが、19世紀に入ると藩財政の悪化や村方における塩の消費量拡大にともない、制度変更を余儀さないでいた。

第3編では、法制史の視点から天保期以降の江戸町方における人別改令の改正企画が検討された。江戸への人口流入抑制を目指した天保14（1843年）年の人別改令は、人別帳作成費用の軽減、管理方法の簡素化などを南北町奉行から老中に求めた提案により、安政5（1858年）年に改正されたが、江戸市中の住民把握と人口流入への監視姿勢は堅持された。

「はがき」に示された研究目的に関して、19世紀前半の死産率、新生児死亡率、乳児死亡率、受胎と出産の月別変動、生命表、19世紀末の死因疾病が史料から直接推測された。2つについては、死産率・新生児死亡率・乳児死亡率の性差と月別出産出産比から人口調査の実効に迫る可能性を拓き、幼年期人口維持仮説で人口行動を意味決定する主体に議論が及んだ。本書の貴重な資料により、先行研究の乏しい重要課題に光があたられることを読者と共に喜びたい。
因疾前名について、医学者ならではの解釈が第6章に示されている。しかし、人口分析の主な史料となった過去帳や人数改帳の史料的性質には及ばず、深い。本書の研究対象地域では、仙台下町の寺院過去帳に供与された天保期の災害の出し方と地域全域に及んでいたため、法隆寺の大規模な逃散が想定されている。（北池万雄『日本の歴史災害—江戸後期の寺院過去帳による実証—』古今書院、1980年）過去帳から鈑薄などによる寺院所在地近辺の被害状況を論ずるには、慎重な史料検討が求められる。古文書史料に精通した歴史家の「そのころの宗門帳は、村の人口計算には用いることができない性質を持っている」という指摘（中田圭一『村から見た日本史』ちくま新書、2002年）にも、真摯に答える責任がある。

第2は微視的考察法の目的である。村の史料を駆使して復元された人口現象がどの地域的範囲を代表しているかという課題については、本書でも十分認識されているにもかかわらず、解明への道は遠い。村の人口分析が個別事例の枠を超えるには、単年度でも広域に保存されている明治前期の戸籍や統計資料などの活用に加え、第2部で読みられたように、人口を支えた生活基盤の全貌を視野に取って人口再構造の理解に努める必要がある。

第3は人口変動の背景にある地域変化を総合的に描く叙述的枠組である。仙台藩・一関藩領における人口動態のなかで、1710年代に終了する人口増加と1840年代に開始する人口回復・増加は、大きな地域変化の兆候となる。しかし、人口増加終了期と人口回復・増加開始期の社会経済的状況は明らかではない。人口現象を時間軸と空間軸のなかに位置づけ、2つの変革期における地域変化の要因解明を中心課題に捉えることによって、研究目的③に掲げられた現実社会の抱える人口問題を解く鍵も、見えて来るのではないか。歴史人口学は、人口再構造の復原から人口現象の背景にある地域変化の要因解明に主眼を移すべき時期に差し掛っている。

本書は序論と結論を欠いているため、編者による仙台藩領を対象とした人口・家族史研究の通例と位置づけられる。各章それぞれに示出された現象を総合すると、どのような歴史像、民衆像、地域像を結晶としてゆくのだろうか。高橋・歴史人口学完結の日を持たい。

本書に収録された研究成果の多くは、「立命館大学人文科学研究研究所紀要」no.87（2006年3月）、同、no.88（2007年3月）、および「立命館法学」no.307（2006年10月）に特集された論文を幅広に圧縮、修正したものである。また、高橋美由紀氏による本書の書評が、「人文学研究」no.43（2008年11月）、75～76頁に掲載されている。合わせて参照を勧める。

（古今書院、2008年3月、xiii + 300頁、6,825円）

鄭在貞著（三橋広夫訳）

『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道 1892〜1945』

高橋 泰隆

ソウル駅（旧京城駅、旧南大門駅）は赤レンガ造りで内部には天然石の素材をふんだんに使用し、ドームをもちアールデコ調の美しい駅舎である。東京帝大教授塚本基の代表作品である。日本統治下の1925年に建設され、優雅な姿は現在なお在存であるが、何時まで破壊されないので使用され続けるか、懸念がないわけではない。日帝時代の建造物というだけでそれが支配と収奪の象徴であり、過去の歴史問題を想起させるのだ。これを壊し、現代の韓国をイメージする最新の駅舎を建設することは容易だ。何故も反日史官の使い勝手が悪いし、補修の簡単ではない。過去の歴史を清算し、近代的で合理的な駅舎に立て替えることは一つの理屈だ。

イギリスのインド支配においても鉄道は重要であった。ムンバイ（旧ボンバイ）はイギリスによるインド支配の象徴の都市である。ムンバイ駅は壮大なゴシック建築であり、英国を象徴する建築様式である。ユネスコの世界遺産に登録された。

日本が朝鮮鉄道を建築した最大の意図は大韓連絡の縄貫線であった。この鉄道と日本国有鉄道を結んだのが関連連絡鉄輸路である。1906年に、山陽鉄道が塙岐丸と対馬丸を就航させた。はじめの間乗客は下関行きが6万6000人、釜山行きが7万5000人であったが、1920年代には往復で20万人、30年代には30万人以上だった。乗客の70〜80％は日本人である。残りの20〜30％は朝鮮人乗客である。朝鮮人は就労や就学のために海を渡った。これとは真逆に乗客のほとんどが朝鮮人であった航路がある。瀬戸内航路（大阪・広島）の「君が代丸」である。往復乗客の99％は朝鮮人である。大阪への出

NII-Electronic Library Service